

大規模介護施設から空き家を活用した 集落内居住への移行とまちづくり

2021年7月に世界遺産に登録された奄美大島。今後多くの観光客の増加が見込まれる奄美大島であるが、その一方で人家から離れて建設された大規模介護施設で高齢者は生活を強いられている。このような地域から離れ、閉じた世界で行われている介護を空き家を活用しながら地域の中で展開し、新たな居住と支援と仕組みとまちづくりを提案する。

▼既存の介護施設大和の園の様子



住み慣れた地域で暮らし続ける仕組みと空き家の活用、奄美の生活・島外からの介護人材・移住者の呼び込みなどを通して集落住民が主体となる新たな暮らしのための拠点を創出する。



敷地

□01 計画敷地

計画地：鹿児島県大島郡大和村大棚
大和村は総面積 88.26 km²のうち約 89% が山林原野で占め、計画地は人口 239 人の**大棚集落**に位置する。集落にはおよそ 20 の空き家が点在する。



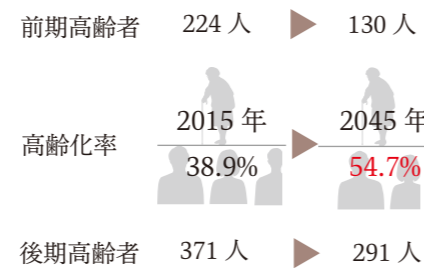
社会背景

□01 進行する人口転出と高齢化

①自然動態

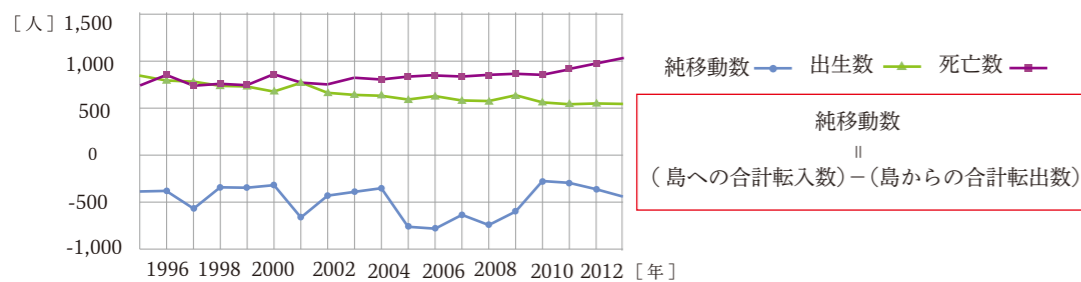
大和村は 2002 年以降、毎年自然減（死亡数>出生数）状態が続いており、年々その差も拡大傾向にある。さらに高齢化率は 2045 年には 54.7% になると予測され、若年層の負担が大きくなる。

大和村の高齢者人口推移予測



②社会動態

社会動態では一貫して社会減（転出数>転入数）状態が連続しており、島全体の人口が減少している。下のグラフは大和村の人口転出入数の推移を表している。

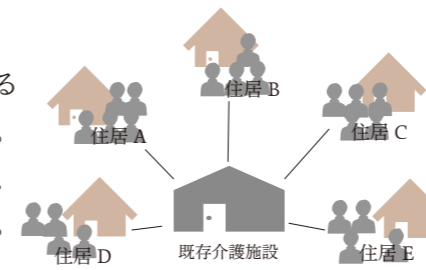


大幅な人口転出により**空き巣**の増加、**耕作放棄地**の拡大、**一次産業の人手不足**が顕著になる。さらに島外への人口流出が加速すると予測される。

提案

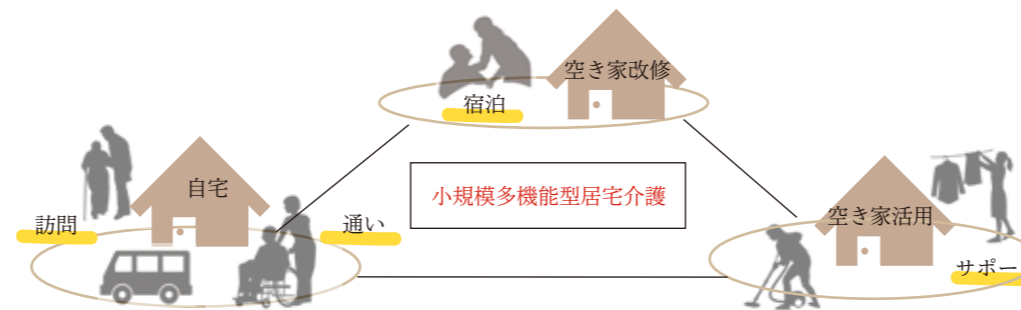
□01 空き家を活用した新たなまちづくり

○大規模介護施設から集落へ
既存の介護施設から少数の高齢者が居住できる住まいを計画し、各集落に分散配置していく。ヘルパーに付きっきりで介護される生活から、地域住民と共に自ら生活を営む環境をつくる。



○小規模多機能型居宅介護による高齢者支援

各集落に配置された拠点（小規模多機能型居宅介護）により在宅居住の高齢者等を支援する。大棚集落にある空き家を改修し、小規模多機能型居宅介護の形態を用い、通所・泊まり・訪問のサービスを連続的に提供する介護拠点をつくる。また集落内に点在する空き家は高齢者と地元住民が交流できる拠点を担っている。



□02 新たな生活様式の探求

近年時期に合わせて住まいの拠点を定める**季節移住**、仕事を複数掛け持つ**副職**をする人が増えてきている。そのような移住者の活躍の場を集落に設け、**個々にあった生活様式**を見直しきっかけをつくる。

本土での暮らし ↔ 島での暮らし

